【目　次】

序　変わり百物語――五
第一話　逃げ水――一三
第二話　藪から千本――一三七
第三話　暗獣――二八三
第四話　吼える仏――四五五
変調百物語事続――五四五

あんじゅう

三島屋変調百物語事続

序

変わり百物語

袋物屋の三島屋は、江戸は神田、筋違御門先の三島町の一角にある。

町の名前をそのまま店名にしているところからも容易に知れるが、主人の伊兵衛が振り売りから一代で興した店だ。それでも、看板を揚げて十一年を経て、昨今は袋物のふたつの名店、池之端仲町の越川、本町二丁目の丸角に続いて指を折られるほどの隆盛ぶりで、店構えこそ小ぶりなものの、市中の粋人たちにはよく知られる店となった。

この繁多な店に、この年の秋のはじめ、伊兵衛の姪のおちかという娘がやってきた。歳は十七、伊兵衛の兄の一人娘で、実家である川崎宿の旅籠〈丸千〉から、行儀見習いの名目で、伊兵衛と彼の女房お民のもとへ託されてきたのである。

本来、裕福な商家が親戚の娘を行儀見習いに預かるというならば、嫁入り前のその娘を江戸の水で磨いてやるのが筋であり、唄に踊りにお茶お花と、習い事をさせるのはもちろん、芝居見物や神仏詣での物見遊山さえも見聞を広めることのうちに入る。しかし、おちかは女中のように働くことを望んだ。忙しく、身を粉にして働く毎日を送りたい。実家の〈丸千〉でも、け

っしてお嬢様暮らしをしていたわけではない。旅篭という商いはそういうものだ。だから働くことには身が馴染んでいる、と。

伊兵衛とお民にも、おちかの気持ちはよくわかった。まだ色香の匂いも淡いこの姪が、一人で江戸へ出てくることになった事情が事情だったからである。

おちかは、良助という幼なじみの許婚を失ったばかりだった。尋常な死に方ではなかった。殺されたのだ。しかも下手人は、おちかが幼いころから兄妹同様に親しんでひとつ屋根の下に暮らしてきた男であり、その男松太郎は、良助を手にかけた直後に己の命も絶ってしまった。

嫉妬と失意と傷心が引き起こした悲劇である。おちかは心底打ちのめされ、一人生き残ったという咎に、我と我が身を責めさいなんでいた。伊兵衛とお民が秋の到来と共に迎え入れたのは、そういう、暗い影に包まれてにこりともしない娘だったのだ。

人は、身体を動かしていると物想いを忘れる。だからこそおちかは働きたがったのだし、同時にそれは、厳しく躾けられ使われることによって己を罰したい、罰してほしいという切実な願いでもあったろう。

伊兵衛とお民は、くどくどとおちかを説いたり、腫れ物に触るように扱ったりはしなかった。苦労者のこの夫婦には、そんなふるまいは空しく、最初から通じやしないとわかっていたからである。

夫婦はおちかの望むように、女中として働かせることにした。どうしたっておちかの辛い過去を詮索したがるであろう口さがない若い女中たちには暇を出し、物慣れた古参の女中のおしま一人を残して、おちかがせいぜい忙しがれるような舞台まで整えてやった。こんなときには、本人がしたいようにさせるのがいちばんの薬だ。

このころお民は、おちかが闇雲に良助の後を追ったりせず、我が身を責めるあまりに病みついたりもせず、事の起こった場所を離れて江戸へ出てきたことを、大手柄だと考えていた。どうしてなかなか、この娘は芯がしっかりしている。いっそしぶといと言ってもいい。それはまったく、悪いことではない。

哀しいことがあったからといって、そのたびに死んでいたら命がいくつあったって足りない。おちかの身に起こったことは度はずれた不幸だが、不幸比べをするのなら、世の中にはもっと過酷なことだってあろう。それでも生きていくのが人というものだ。おちかなら、きっとそれを体得する日がくるだろう——

一方の伊兵衛は、叔父が年若い姪を案じているわけだから、さすがにお民ほど剛胆には割り切れない。このあたりが男と女の差でもある。磊落なふうを装ってはいても、思い詰めたようにきりきり働いて日々を過ごすおちかを見れば、彼の胸は痛んだ。

何かもう少し、してやれることはないか。

そんな折、たまたま伊兵衛の招いた客を、おちかがもてなさねばならぬことがあった。夫婦によんどころない急用が起こったからである。客は、伊兵衛の碁敵であった。

囲碁は伊兵衛が遅く覚えた道楽である。それだけに病は重く、彼は三島屋のなかに、「黒白の間」という座敷を設けて、暇をこしらえては好敵手と対峙することを楽しんでいた。

その日は伊兵衛の急用で、黒白の合戦はお流れになった。伊兵衛に代わってそれを詫びるため、女中から主人の姪に直って来客の前に出たおちかは、気の重いこの役目を、おそらくは本

人にとっても思いがけず、よく務め、よく果たした。

帰宅した伊兵衛は、姪の口から、お客様が古い打ち明け話をしてくださったと、ひとわたり聞かされて驚いた。それは哀しく怖ろしく、また怪しく不可思議な話であったからである。

伊兵衛は思った。これは縁だ。彼が親しんできた碁敵が、初めて顔を合わせたおちかに、永いあいだ密かに隠してきた古傷を見せて、語って聞かせた。おちかの側に、呼び寄せる何かがあったのかもしれぬ。二人のあいだに、通い合うものがあったのかもしれぬ。この人になら語ってもいい、と。いずれにしろ、これは導きというものだろう。

客が帰ったあとのおちかの沈みようが、それまでとは少し違ったふうに見えることも、伊兵衛の心を励ました。おちかはぐるぐると己を責める堂々巡りをやめて、一心に考え込んでいるのであった。

伊兵衛は気がついた。今のおちかには、慰めや励ましよりも、むしろこうした形で世間というものに耳を傾けることこそが必要なのではないだろうか。

彼は出来物の商人である。こうと決めたら仕掛けは早いし、手配りもいい。さっそく懇意の口入屋に頼んで、袋物屋三島屋が、江戸中から不思議なお話を集めておりますと、広く触れ回ってもらうことにした。秘密は固く守ります。胸の内に、永の年月封じ込めてきた事柄を、ひそやかに語りたいと思う方々よ。どうぞ三島屋をお訪ねください――と。

こうして、一度に一人ずつ、一話語りの百物語の聞き集めが始まったのであった。

第一話 逃げ水

「叔父さんたら、まだ続けるおつもりなんですか？」
今日から師走という、忙しなくもあり、その忙しなさに妙に気分が浮き立つような朝のことである。
おちかにとっては、親元を離れて初めて迎える年の瀬だ。実家の旅篭とこの三島屋とでは商いがまるで異なるし、江戸市中の繁多なお店とあれば、この月の内に始末しておかねばならぬ事柄も、正月の支度にも、街道筋の宿場にはない決まり事があるかもしれない。習い覚えることがたくさんありそうだと、あらためて襷を締め直すような気分で朝餉をとっているところへ、叔父の伊兵衛がいきなり言ったのだ。今日は八ツ（午後二時）に、「黒白の間」にお客様を二人お招きしてあるよ、と。
「まだとは何だね、まだとは」
膳の上のものを飯粒のひとつも残さずきれいに平らげて、悠然と茶を飲んでいた伊兵衛は、さも心外だというふうに眉を吊り上げる。

「続けるに決まっているじゃないか。いったいいつ、私が言いましたかね。おちか、変わり百物語はもうやめだよ、などと」
だって――と、おちかは少しくちびるを尖らせた。
「この二月でおまえが聞き取ったお話は、たったの五つだよ。それも、おまえ本人の話まで勘定に入れてだ。百まで、あといくつ足りないとお思いだね」
「足りないと言っては、鬼が笑いそうな数だわねえ」
叔母のお民も、鬼より先に自分が笑い出しながら口を添える。
「このくらいの引き算ならば、新太だって間違うまいよ。あと九十五だね、おちか」
新太というのはこのお店の丁稚である。今年の春の出替わりで奉公にあがってきた新参者で、歳は十一。まだまだ頑是無い子供だが、お民とおしまの仕込みがよろしく、新どん、新どんと皆に追い使われながらよく働いている。ただ、どうにも読み書き算盤の覚えがよくない。だからこんな折にも引き合いに出されるのである。
「あたしはてっきり、ひと段落ついたものだとばかり思っていました」
伊兵衛が言ったとおり、おちかはこの不思議話の聞き集めのなかで、自分のことも語った。聞き手は女中のおしまで、場所は来客たちと同じ「黒白の間」だった。
それによって、おちかのなかではひとつの区切りがついた。伊兵衛もそれは承知している。
「おまえの気持ちが落ち着いたのは、もちろん、めでたいことだ。しかしねえ」
お民と顔を見合わせて、
「灯庵さんが、この件にはえらく入れ込んでいるんだよ。それもまあ、こちらからの頼みよう

に力が入っていたからなんだけれども」

灯庵は三島屋出入りの口入屋だ。神田明神下に店を持つ坊主頭の老人で、脂ぎった蝦蟇のようなご面相の持ち主である。ただ人を見る目は確かだし、顔も広い。

「灯庵さんの店では、うちを訪ねてくるお客が順番待ちをしているそうだ。こっちから持ち込んだ話なんだから、せめてそのお客さんたちだけでもお迎えしないとね。私もバツが悪いじゃないか」

江戸中の不思議話を集めたいから募ってくれ――という伊兵衛からの依頼を受けて、灯庵老人は、瓦版屋や岡っ引きの手下の小者たちにまで触れ回った。おかげで三島屋には、いっとき、そういう人びとが入れ替わり立ち替わり現れて、奉公人たちが目を剥く仕儀となった。忠義一途の番頭の八十助などは、いったいうちのお店に何が起こっているのかと、青ざめていた。

「珍しいお稽古事ぐらいに思って、もうしばらく続けてみておくれよ、おちか」

最初のうちは夫の思いつきに剣呑な顔をしていたお民も、今ではそんなことを言う。

「おまえはどうやら、聞き上手らしいよ。それに、お客様を迎えるとなれば、お洒落のし甲斐もあるじゃないか」

伊兵衛とお民には息子が二人いるが、今は二人とも他人様の釜の飯を食うために三島屋を離れている。心寂しいお民には、おちかは恰好の娘がわりなのだ。

「お客様の数だけ、新しい着物をこしらえたっていい。楽しみだねえ」

すっかりその気になってしまっている。これでは、逆らっても仕方がない。

気持ちに区切りがついたからといって、女中働きまでやめたわけではなく、お飾りの居候お嬢様になる気はまったくないおちかだ。午過ぎまではおしまと二人、忙しく過ごした。三島屋では主人夫婦が先に立って働いている。さらにお民は、家の仕切りと袋物の仕立てのふたつの仕事をこなしているから、食事時以外は無駄話をする暇もない。

「おちかさん、もう着替えないと間に合いませんよ」

八ツの鐘を聞いて、おしまが我に返ったようになっておちかを急かした。やっと昼ご飯の片付けが済んだところである。三島屋は通いの職人たちまで合わせて十人の世帯だが、日に三度その口を賄うだけでもかなりの手間だ。

おちかは急いで自分にあてがわれた六畳間の座敷に戻り、箪笥を開けた。女中から主人の姪になるのだから、前掛けと襷を外すくらいではおっつかない。着物と帯と、半襟もとっかえて、結綿の髷には、紅珊瑚の簪を足す。

このごろ時々、この髷を、町場の裕福な商家の娘たちのあいだで流行っている唐人髷に変えてはどうかと、お民が勧めるようになった。唐人髷は、おとなしい桃割や結綿と違い、髷の前が開いて鹿の子がはっきりと見える華やかな髪型である。自然と鹿の子の色や柄や材質にも競って凝るようになる。無論、女中にふさわしい髪型ではなく、お民もわかっていて謎をかけているのである。女中奉公をやめて、本当にうちのお嬢さんになっておしまいよ、と。黒白の間に来るお客の数だけ着物をこしらえようなどという考えも、根は同じだ。

叔父も叔母も、三島屋をここまで興すあいだには苦労が多かったろう。貧乏もしたろう。今だってけっして贅沢な暮らしぶりではない。無駄遣いというものは、伊兵衛にもお民にも無縁の言葉だ。

それでもおちかには贅沢をさせたい、着飾らせてやりたいと思うのは、叔父と叔母の思いやり、優しさ故だ。おちかに、若い娘らしい明るさを取り戻してほしいと願ってくれているのである。

有り難い。嬉しい。叔父と叔母の気持ちは充分に心に染みる。でも、胸の奥で手を合わせるような気持ちで、おちかは思う。

――あたしには、まだまだそんなことは許されない。

この支度も、あくまでもお客様に失礼があってはならないからだ。

黒白の間へと急いで廊下を戻ると、ちょうどそこから出てきて唐紙を閉めたばかりのおしまと出くわした。

「あ、お嬢さん」

この女中は、おちかが来客用に着替えると呼び方を変える。

「お客様、もうお見えなんですね」

「はい、お通ししたところなんですけど」

おしまは声をひそめて前かがみになった。

「今日のお方は変わってますよ」

おしまがいくつであるのか、おちかは正確なところを知らない。おちかより二十は上だろうと見当をつけるばかりだ。背が高く、ふっくらとはしているが、女にしてはかなりいかつい顔立ちなので、若いときから老けて見られたと、本人が笑って言っていたことがある。

「変わってるって……」

珍しい方なのと問うと、おしまはかぶりを振る。

「見かけはよくいるお店者です。歳からして、どこかの番頭さんでしょうけれど」

丁稚を連れているという。

「お供なんでしょう」

「お供なら、一緒に座敷にあげたりしませんよ。外で待たせておくか、あとで迎えに来させたりするものです。うちの新どんだって、そうでしょう？」

おしまの言うとおりである。そういえば伊兵衛も、今日はお客様を二人お招きしていると言っていた。

「なかで、番頭さんと丁稚さんが並んで座っているんですか」

「ええ。それに何だかその様子が」

番頭の方が丁稚を憚っているように見える、というのである。

「こう、横目で見たりしましてね。丁稚さんの方はきょとんとしてるだけですけど」

あれはまだ野育ちのままですよと、訝るのと同時に、おしまは興味を引かれているようだ。

「もしかすると何かの趣向かもしれませんね。お話にかかわりがあるのかも」と、おちかは言った。「ともかく、お会いしてみないことにはわかりません」

はい、とおしまは下がって道を開けた。

「お嬢さん、とってもおきれいですよ。だけど今日の語り手があの丁稚さんだったら、猫に小判ですねえ」

よく言うものだ。おちかがつい笑い、おしまも忍び笑いを返し

た。
廊下から畳二枚分の次の間に入って、おちかは唐紙の前に正座すると、
「失礼をいたします」
なかに子供がいると聞いたから、覚えず、柔らかい声音になった。いつもは主人伊兵衛の名代ということで、この黒白の間には、できるだけ毅然として入るように心がけているおちかである。
「どうぞ」
応じたのは嗄れた男の声であった。
おちかは唐紙を開けた。黒白の間は南向きで、雪見障子の外には庭がある。今は閉じられている障子に、師走の午後の陽射しがやんわりと差しかけていた。
床の間を背に、二人の客はいた。おちかと同じようにきっちりと膝を揃えて正座している。それぞれの傍らに有田焼の手あぶりが据えてあって、炭が赤く熾きている。
おしまの言うとおり、見るからにお店者らしい二人であった。古参の番頭と丁稚である。他の組み合わせは、ちょっと思い浮かばない。老人と孫というのでは、あまりにも芸がなさすぎるだろうし。
「三島屋伊兵衛の名代、ちかと申します。主人の姪にあたる者でございます」
おちかは手をついて深く頭を下げた。
古参の番頭ふうの男は房五郎と名乗った。そして隣の子供に挨拶を促してから、
「これは手前どもの丁稚の染松と申します」

当の染松は、促されたくらいでは通じない。
「これ、ご挨拶をせんか」
小声で叱られて、やっとぺこりとした。
その仕草に憎さげなふうはなかった。おしまの鑑定通り、まだ行儀を知らないのだろう。つっ丈の縞の着物に小僧髷を結ってはいるものの、よそいきだから前垂れは外しており、それでなおさら山出しのまんまに見える。ほっぺたに泥がくっついていてもおかしくないほどだ。
おちかは彼に微笑みを返した。と、子供の目がまん丸になった。誰かに笑いかけられるなど、初めてのことであるかのようだ。
染松とは、丁稚の小僧さんにしては小粋な名前である。
ある程度の構えの商家の主人は、代々同じ名前を襲名してゆく決まりがある。この三島屋でも、今は武者修行に出ている総領息子の伊一郎が跡を継いだあかつきには、二代目伊兵衛を名乗るはずだ。
それとは別に、お店によっては、何かしらの験を担ぐなどの理由があって、奉公人にも特定の名を付けることがある。染松の場合もそうかもしれない。
ちょうどいい、それを話の端にしようと思ったとき、
「三島屋さん」
房五郎がおちかに向き直った。嗄れた声とは裏腹に、その目には思いがけない力があった。羽織姿も馴染んでいる。
「灯庵から、こちら様のやり方と申しますか、この百物語の決まり事についてのお話は伺って

参りました」
「ありがとうございます」
「ですから、お話の聞き手がお嬢さんだということは存じております。今の三島屋さんに、こんな粋狂に、いちいちご主人が出張ってこられる暇があるはずはございませんからな。まったく、ご繁盛で何よりでございますよ」
言い方に、ちくりと棘があった。
「ただ、手前どものお店や主人の名前などは申し上げられません。伏せたままでもよろしゅうございますな」
「一向にかまいません。どうぞ、お好きなようになさってくださいませ」
おちかはもう一度頭を下げてみせた。
「ただ、お話を語っていただく上では、あれこれと伏せたままではご不便かもしれません。障りのないよう、この場限りのお名前を付けていただいても結構でございます」
三島屋がこの黒白の間でお客様からお伺いしたいのは、皆様がどこのどなた様であるかということではなく、お話の中身の方でございます。これまでも何度か前口上として言ってきたことだから、おちかはすらすらと口にした。嫌味なつもりは毛頭ない。
なのに房五郎は、何か気に障ったかのように、苦々しい口つきになっている。
「灯庵の請け合うことだから信用して参りましたが」
お嬢さん――と、急に気色ばむ。
「真実本当、嘘いつわりなく、あなたが何とかしてくださるんでしょうな？」

これには、おちかの方がきょとんとする番だった。
「は？」
「いえですから、あなたが万事解決してくださるんでしょう？　私はそのように聞いて参ったのですよ」
解決とは何事だ。
「わたくしが、何を解決するんでございましょうか」
房五郎はみるみる焦れた。「はぐらかしちゃいけません。これでも私は忙しい身体ですし、金井屋は」
言ってしまって、あっと口を止めた。
おちかはにっこりした。「このお話に出てくるお店は、金井屋さんという屋号にいたしますんですね。承知いたしました」
房五郎は苦り切る。染松は依然、目を丸くしたまま二人を見比べている。いたって邪気がない。
「その金井屋さんの、あなた様は」
「番頭でございますよ」
朱塗りの算盤を預かっておりますと、苦い顔のまま、そこだけちょっとばかり反っくり返って言った。
房五郎にとっては自明のことなのだろうが、おちかには〈朱塗りの算盤〉は聞き慣れない言葉だった。立派な算盤という意味合いで、つまりはお店の金の出入りを握っている大番頭の地

位を示す符丁なのだろうと見当をつけるくらいである。
袋物屋や小間物屋のあいだでは、この言い方はしない。実家の営んでいる旅籠業でもそうだ。だから金井屋は、それ以外の業種なのだろう。
おちかには、黒白の間で聞き役を務めるだけではなく、聞いた話をあとで伊兵衛に伝えるという役目もある。今日はそのとき、叔父さんに訊いてみよう。
房五郎がえらく押し出しのいい番頭だということも、金井屋の業種とかかわりがあるのかもしれない。うちの番頭の八十助さんもしっかり者で、三島屋の要石だけれど、こんな貫禄は持ち合わせていないもの。
「ともかく私は、お店のために、一縷の望みをかけるつもりで、こちらをお訪ねする順番を待っていたのですよ。ですからお頼み申します」
房五郎の言葉に、いよいよおちかは当惑した。灯庵では、何と言ってこの変わり百物語を売り込んでいるのだろう。
「金井屋さん」と、おちかはさらに座り直した。「どうやら、お話に掛け違いがあるようでございます」
「何ですと？」
「わたくしどもでは、確かに不思議話を聞き集めております。でもそれは、本当に聞くだけ、お話を拝聴するだけのことでございます。何か困難をほどいたり、謎を解いたりするわけではございません。もしも灯庵さんが、金井屋さんにはそのように言ったということであるならば、それは間違いでございます」

既に気色ばんでいた房五郎は、はっきりと怒気を浮かべた。「それでは話が違う！」
「ですから、お話が掛け違っていると申し上げております」
おちかは丁寧に、やんわりと言った。一方的に湯気をたてている房五郎は、それでさらに目を吊り上げ、
「これじゃあ、まるで騙りというものだ」
吐き捨てた、そのときである。
染松が下を向いて、ぷっと笑った。
やはり邪気はなく、ただもう子供が素で面白がっているだけの、くすぐったそうな笑いだった。驚きが先に立たなかったならば、おちかもつられてふき出してしまったかもしれない。
「こ、この」
しかし房五郎は真っ赤になった。
「何を笑うか、この大莫迦者が！　だいたい、みんなおまえが悪いんじゃないか」
今にも染松の襟首をつかみ、振り上げた手で叩こうとする。狼藉に、手あぶりがひっくり返りそうだ。
おちかは止めに入った。とっさのことなので、遠慮がなかったかもしれない。房五郎と染松のあいだに割り込んで、背中に染松をかばう恰好になった。
「おやめください、番頭さん」
世間では、年若い奉公人を年長者が打擲するなど珍しいことではない。それが躾だという風潮もある。が、三島屋では御法度だ。伊兵衛もお民も、何より体罰を嫌う。そんなことをし

なければ奉公人を躾けられぬのなら、それはまず使う側に不明があるのだと考えている。
「他所ではともかく、この三島屋の内でそんなことをされては困ります！」
おちかの制止にも、怒りのあまりわなわなとしている房五郎は、勢いが止まらない。染松を叩き損ねた手を持て余して、
「ああ、まったく！」
どうするかと思えば、己の額を強く叩いた。ぎょっとするようないい音が響いた。
「いったいどうして、こんなみっともない羽目になったもんだろう」
漏れ出た声は、胸を潰されかけているかのような苦しみにかすれていた。
気がつけば、背後の染松がおちかの帯にしがみついている。そしてその恰好のまま、小さく言った。
「堪忍しておくれよ、番頭さん」
おいらも、わざとやってるわけじゃないんだから。
おちかはゆっくりと首をよじり、肩越しに背中の子供の顔を見た。
染松は大きな目をしていた。口が半開きのままなので、すきっ歯が丸見えだ。同じ年頃の新太と比べて、小さくて色の悪い歯がとびとびに並んでいる。山出しのこの子の、金井屋へ来る前の貧しい暮らしが、あいだから透けて見えるようである。
「今、何て言ったのかしら」
問いかけに、染松は目を伏せた。怯えるよりも、急に恥ずかしくなったのか、おちかの帯から手を離して小さくなった。

「もしかして、今日のお話の主は、こちらの小僧さんの方ではございませんか」
おちかは房五郎に向き直った。押し出しのいい番頭は、顔の色を赤から青黒くして、こちらも恥じ入っているようだった。
「申し訳ございません。とんだ粗相をいたしまして」
おちかの胸はまだどきどきしていたが、それを顔には出さないコツを、少しばかりは身につけている。
「わたくしにお詫びいただくことはございません。それに、ここで起こったこと、ここで語られる事柄は、けっして外に出ることはございません。ご安心くださいませ」
手あぶりの位置を直して、おちかも二人の対面に戻った。先ほどまでより、心持ち染松の側に寄って座った。染松がまだ縮こまっていたからだ。
「それより、お茶はいかがでございましょう。女中を呼んでもようございますか」
着物の襟を整えながら、房五郎は無言でうなずいた。額に冷や汗が浮いている。
「お菓子もありますからね」
染松に微笑んで、おちかは手を打っておしまを呼んだ。この座敷では、客に茶菓を出す頃合が難しい。どういう形であれ、客の話の腰を折ることになるし、黒白の間の閉じた雰囲気を乱してしまう心配もあるからだ。そのあたり、おちかも心得ているし、おしまにも通じている。
やがて茶菓の盆を捧げて黒白の間に入ってきたおしまは、芝居がかったようにしゃなりしゃなりと給仕をした。そっとおちかに目配せしてきたところを見ると、珍しい取り合わせの客に興味と不安があって、廊下で聞き耳をたてていたらしい。

――いけすかない爺でございますね。

いい大人のくせにいきなり怒気を露わにし、子供を叩こうとした房五郎が気に入らないのだ。おちかも目顔で宥め返した。

おちかのそばには、客の手あぶりよりもひとまわり大きな火鉢が置いてある。おしまはそこに五徳を据え、鉄瓶を載せて、またしゃなりしゃなりと下がった。一礼して唐紙を閉めるとき、目を凝らすようにして染松をじっと見て、それがまた年増女中のはんなりした立ち居振る舞いに見入っていた子供の目とぴったり合ってしまい、互いにまばたきをして急いでうつむいたのが可笑しい。どっちもどっちの、いたずら小僧のようだ。

「さ、召し上がれ」おちかは染松に菓子を勧めた。「ここではあなたもお客様ですから、遠慮しなくていいんですよ」

塗りの小皿にちんまりと載せてあるのは、三島屋がよく使っている近所の菓子屋の饅頭である。

「もう旬は過ぎたけれど、このお菓子屋さんではまだ栗饅頭をつくっているの。食べてごらんなさい。真ん中に大きな栗が入っているから」

染松は唾を呑みそうな顔をした。すぐにも手を出したそうなのに、横目で房五郎の顔を窺う。当の番頭は、すっかり白っちゃけてしまった顔を懐紙で拭っていた。

おちかは察した。この房五郎という人も、日ごろからこんな癇癪持ちではないのだろう。こうして取り乱すには、何だか知らないがよほど困じる事情があるに違いない。

そしてそれは、どうやら、栗饅頭を前に手をもじもじさせている山出しの丁稚小僧のせいであるらしい。年季の入った大番頭であるからこそ、それが面憎く、歯がゆく、つい頭に血がのぼってしまうということなのではあるまいか。

「確かに灯庵では」

親の仇にでも会ったかのように湯飲み茶碗を睨み据えていた房五郎が、顔を上げてひとつ息をつくと、言った。

「こちら様で謎をほどいてくれるというようなことは申しておらなんだかもしれません。それは私の早のみこみだったのかもしれん。灯庵はただ、こちらで話をしてみれば、何かの糸口になるかもしれないと申しただけだったと思えます」

意固地に弁解する口つきながら、落ち着きを取り戻しているようだ。

「ただ三島屋さんは、堀江町の越後屋さんと懇意にしておられますな？」

堀江町の越後屋は草履問屋である。三島屋ではこの店と組み、意匠に富んだ草履の鼻緒を売り出し始めたところで、これがまた評判になっている。

おちかがはいとうなずくと、

「越後屋さんには、永く病みついていた人がいたでしょう。お内儀の従妹だか義理の妹だか、親戚筋の」

「はい、存じております」

おたかという女である。この変わり百物語の二番目の語り手で、語ったことによってさらに不可思議のなかに深く囚われ、五番目の話でそこから抜け出すことができた。二番目と五番目の話はいわば続きものになっており、おちかは五番目の話の方で、おたかと共に、話の核心と

言える場所まで身体を持って行った。
妙な表現ではあるが、そうとしか言い様がない。足を運んで行ったのではないからだ。いっとき、この世の外で、まだあの世ではない場所へ赴いた。そしておたかと一緒に戻ってきた。そういう体験をしたのだった。
「その人が近ごろきれいに本復なすった」
「はい」
「それが三島屋さんのおかげだと、私は噂に聞いていたのですよ。だから――」
だから早のみこみをしてしまったのだと言いたいのだろう。
おちかとしては、越後屋のおたかのことがそんな噂になっているとは驚きだった。
「よくご存じでいらっしゃいますが、越後屋さんのことは、それほど広く噂されているのでございましょうか」
逆上が冷め、肩を落としている房五郎だが、ふと持ち直す感じになった。
「世間様に広く知られているわけではございません。もちろん、越後屋さんが言いふらしているのでもありません。むしろ伏せておられるようだ。ただ私どもの商いでは、ほかで知られていないことを知るのが肝要で……。ですから、噂という言い方では違いますか」
何と言えばいいだろうと自問自答している。世間に知られていないことを知るために、間者を使っているかのように聞き取れないでもない。金井屋は何を商っているのだろう。
「ともあれ、そういう前段があるもので、つい前のめりになってしまったのでございます。お許しください」

気がつくと、いつの間にか栗饅頭を頬張って、染松がまたきょとんとしている。
「美味しいでしょう？」
おちかが問うと、ほっぺたを饅頭でふくらましたままうなずいた。あわてて手で口を押さえるのが可愛らしい。
「よくわかりました」
おちかはにこやかに応じてから、真顔になった。
「それにしても、金井屋さんではたいそうお困りのご様子でございますね。こちらの小僧さんが、お店のなかで、何か障りを起こしているということでしょうか」
悪さをしていると言いかけたのを、寸前で変えて尋ねた。さっきの染松の〈わざとやってるわけじゃない〉という言葉は、軽いものではないと思ったからだ。
「ええ、障りも障り、大障りです」
落ちていた房五郎の肩が、お店の大黒柱らしい張りを取り戻してきた。染松を見る目にも険が戻る。
「しかし、信じていただけますかな？」
探るような表情に、おちかは口を結んで真顔でいることで応えた。
「突飛で、面妖でございますよ」
房五郎は、なおもおちかを試すように念を押す。間が空いた。すると、
「おいらが」と、染松が口を開いた。
「おまえは黙っていなさい」

頭ごなしに言われても、今度は縮みあがらずに、染松はおちかの方に目を向けた。助けを求める眼差しだ。

おちかは彼にうなずいて、

「あなたのお話も、あとでちゃんと聞きますからね」と言ってやった。

「こいつは嘘しか申しません」

房五郎はとことん染松が憎いらしい。いっぺん逆上して冷めたことで、かえって枷が外れたのだろう。

「作り話と、己に都合のいい出まかせばかりを言う小童でございますよ」

「でも、こうしてお連れになりましたでしょう」

房五郎はひるまない。「これを三島屋さんに連れてくることが、私の話の何よりの裏付けになると思ったからでございますよ。そうでないと信じてもらえないほどのおかしな話なのです。ええ、目で見てもらいませんとな」

と言われても、染松はただの子供にしか見えない。

「何が目に見えますのでしょうか」

水が――と、房五郎は重々しく言った。

「水が、逃げるのでございます」

おちかも面妖な話には慣れてきている。房五郎が気張っているほどには、重たく受け取れない。

「どこから逃げますか」と、間の抜けた受け答えになった。

房五郎は真剣そのものだった。声にまた怒気が混じる。「井戸からも水瓶からも花活けからも、家中のありとあらゆる場所から逃げてしまいます」

この染松がいる家のなかでは、という。

「こやつが近づくと、その井戸から、その水瓶からは、また水が逃げます。逃げて、からからになってしまうのです」

忌々しそうに吐き捨てる房五郎に、おちかは最初に思いついたことを、ついついのどかに言ってしまった。

「それは不便でございますわねえ」

染松がぐいと下を向いた。笑いを堪えたのだと、おちかにはわかった。

房五郎がまた鬼のような顔になった。

「笑い事ではございませんよ！　ひと晩でもこやつを家に置いてご覧なさい。どれほど難儀か、三島屋さんにも身に染みておわかりになるでしょう」

こういうとき、真っ向からけんけん言われれば言われるほど可笑しくなるのが人の情である。おちかも笑いを堪えきれなくなったので、その笑みは染松に向けることにした。

「あなた、そんな手妻みたいないたずらをしているの？」

染松はぶんぶんとかぶりを振る。ちゃんとお答えしないかと、房五郎が叱る。

「いえ、かまいません。そんなにお叱りになったら、しゃべりにくくなってしまいますよ」

怒りん坊の番頭をいなしておいて、おちかはひと膝、染松に近寄った。

「いたずらじゃないのね？」

染松はうんとうなずいた。
「何か仕掛けはあるの？　本当に手妻じゃないのかしら。手妻は知っているでしょう？　見世物小屋には行ったことがあるかしら」
染松も少し、おちかの方に身を寄せた。
「水芸は、見たことがあります」
「そう。どこで見たの」
「大川のたもとの、掛小屋がいっぱいあるところ」
「両国広小路だわね。あなたはまだ、江戸の町のことはよく知らないのね」
「江戸に来て、やっと半月です」房五郎は一人で怒っている。「何と永い半月だったことか！」
勝手に湯気をたてさせておこう。
「水芸には、誰が連れていってくれたの」
「富半さん。水芸人の水も逃げるかどうか、見てみようって」
おちかは目を瞠った。「逃げた？」
「逃げました」
染松はちょっぴり得意げである。
「富半さんもびっくりして、おまえはやっぱり本物のお旱さんだって」
富半は人の名前だろうと見当がつくが、〈お旱さん〉となると別格だ。
「お旱さんて、何のこと？」
「神様」と、染松はあっさり答えた。「おいらにくっついてる」

さすがに驚いた。この子は神を宿しているというのか。
「どこかの土地神様でしょうか」
おちかは房五郎を見返って尋ねた。番頭は口をへの字にしている。
「これの村の山の神だそうです」
祟り神ですよ、と言い切る。「旱と水涸れをもたらす悪神です。だから厳重に封じられているのを、こやつが外に出してしまいおった。そして取り憑かれたのです」
とんでもない小童だ、そのとんでもないお荷物を金井屋におっつけて寄越した戸辺様も戸辺様だと、また新しい人の名前が出てきた。
水は暮らしに欠かせないものだし、せっかく井戸から汲んできた水が、汲んだそばからどこかへ消えてしまうのでは、炊事にも手を洗うにも喉を湿すにも不便きわまりない。しかも大元の井戸まで涸れるとあっては、人の生き死ににもかかわる大事だ。
話のとおりであるのなら、房五郎のいる金井屋は、この半月、さぞひどい目に遭ってきたことだろう。だから怒るのはわかるが、祟り神に憑かれたなどという度はずれた話は、もう少しゆっくり語ってもらわねば困る。
「染松さん、いえ、染どん」
「はい」すきっ歯に栗の名残をくっつけて、染松はいたって素直にうなずく。
「あたしがしばらく番頭さんとお話をするあいだ、うちの台所で待っていてくれる？　廊下へ出て、左の突き当たりよ。さっきの女中さんがいると思うから、何ぞ御用があったらお手伝いしますって、言ってみてちょうだい」

「おねえさんにそう言いつかったって、言っていいですか」
おちかの「うん」にかぶせて、
「お嬢さんとお呼びせんか！」
染松は聞いていない。「さっきのおばさんに言えばいいんですね」
「あの人はおしまさん。おばさんなんて呼んだら怖いわよ」
染松は子供らしくころころ笑って、身軽に立ち上がった。
「うちには新どんという小僧さんがいるの。あなたと同じくらいの歳だから、その子が何か手伝ってって言ったら、仲良くしてあげてね」
「はい、わかりました」
言って、唐紙に手をかけ、くるりと振り返る。「おねえ――お嬢さん」
「なあに」
「その鉄瓶」
おちかのそばの火鉢の上を指す。
「もうちっと、避けといたがいいです」
湯が沸きすぎないよう、おしまが火鉢の炭には灰をかけていった。それでも鉄瓶の注ぎ口の先からは淡い湯気が出ている。
「水、逃げるから、危ないです」
拙い言い様だが、真摯だった。
「あと、そこの花の飾ってあるとこも」

床の間に活けてある小菊へと指を移す。
「きっともう空だから」
容れ物が小さいと、早いから。
山出しの子の生真面目な目に、おちかはうなずいた。そして染松が座敷から出るとすぐに、身を返して火鉢の鉄瓶の取っ手を持ち上げてみた。
あっと思った。
軽い。底の方に少し残っているだけだ。茶を入れ替えるための湯だから、おしまは鉄瓶をいっぱいにして置いていったはずである。沸いていたとしても、ここまで減ってしまうほどの時は経っていないのに。
急いで床の間の瀬戸物の花活けに近づいた。こちらは少ないどころではない。すっかり空だった。小菊を挿した剣山が剥き出しになっている。
「ほら、申し上げたとおりでしょう」
房五郎がいささか意地悪に言う。口元は笑いに歪んでいる。
「今にご覧なさい。台所でも騒ぎが起こりますよ」
おちかは水気のない花活けの底を指でさすり、房五郎の顔を見た。それからまた花活けに目を落とし、さらに房五郎を見た。
「私のせいじゃない。あの小童です」
ひるむところが大人げない。
「驚きました」おちかはふうっと息を吐いた。「本当にびっくりです」

「あれを連れてきた甲斐がございました」
「この小菊はわたしが活けたんです。昼食のあとに」
「ですから染松の仕業なのですよ」
「よほど水あげのいい菊なのかしら」
「そんなことあるわけないでしょう！」
わかっている。房五郎がさも憎さげに笑うものだから、こっちも混ぜっ返してやっただけだ。
とりあえず花活けを元のように置いて、おちかは切り出した。
「あの子はどこから来たのですか。いえ、村の名前は結構でございます」
「上州北の、山のなかでございますよ」
山、山、山ばっかりの土地だという。
「田畑は少ないが、松や杉の産地でございましてな。杉は建家に使われますし、松は庭木としても価値があります。形がいいのですな」
その地の庄屋に、金橋という家がある。
「神君家康公の関東入りのころから続く旧家でございます。これが金井屋の祖でございまして」
仕切っている土地の産物が樹木であるから、金橋家は昔から材木問屋とつながりが深かった。それで分家のひとつが江戸へ出て、今の商いを興すことにつながったという。明暦の大火がきっかけだったというから、こちらも旧い。
「しかし金井屋は材木商では」

「ございませんのですね。金橋家も仮名です。詮索はいたしません」
房五郎はこほんと空咳をした。
「染松はその金橋家の奉公人の子です」
七人兄弟姉妹の末っ子で、
「父親は厩番の下男、母親は女中でございます。両親共に、まあ馬よりは賢いかというぐらいの者でございますが」
ずいぶんな言い様である。
山村の庄屋とはいえ、自前の厩を持っているのなら、金橋家は相当な身上だろう。
「子供たちもみんな、金橋家に仕えるのでしょうか」
「樵や炭焼きになる者もあり、小作人として働く者もおります。もちろん、それでも金橋家に従う者であることに変わりはございません」
金橋家に食わせていただく身分だと、房五郎は言い足した。
「なのに、染どんだけは江戸に出てきた？」
「ですからそれが戸辺様のお指図で」
戸辺様とは山奉行配下の与力の一人だという。山奉行というのは山林を管轄する役所で、樹木が産物である土地ならば、その権限はかなり強かろう。庄屋に対して睨みがきくのも当然だ。
おちかは山村の暮らしを知らないが、宿場町で生まれ育ったので、縁のない土地のことでも、耳で聞き知っている事柄はある。川崎は東海道でも指折りの大きな宿場だから、国中から大勢の人びとが通りかかる。彼らが〈丸千〉に泊まり、宿のなかでてんでに世間話をしているのを

聞きかじっているだけでも、おそらく一生訪れることがないであろう遠い郷のしきたりや風俗や産物について、それなりに知ることになるのだ。

「染どんを江戸に連れてきた富半さんという方は」

「金橋家の家人でございます。山頭と申しましてな。山林で働く者たちを束ねる役目を務めるのですよ」

「では大切な役職ですね」

そんな富半が、染松一人のために仕事をおいて江戸へ出てきたわけである。山奉行の与力は指図に出張ってくるわ、大事な家人はお供についてくるわで、染どんは金橋家の御曹司よりも篤い扱いを受けたようである。

「そりゃあなた、あいつめは、行くところ行くところに水が逃げるという災いを呼ぶのですから、大事になって当たり前でございますよ」

江戸の商家のお嬢さんには見当もつきますまいがと、またぞろ憎さげな口つきになる。

「山がちの土地で水が涸れるというのは、それはもう怖ろしい災厄なのでございます。井戸が涸れたなら水売りを呼べばいいなんていうものではございません」

江戸市中でも、井戸から水が汲めなくなったら大変である。現に房五郎だって、金井屋がそれで困っているからこそ、順番待ちまでしてここに来たのだろう。

まあ、言い返しても詮無いことだ。おちかは聞き流しておいて、問い返した。

「そんなに涸れましたか」

「それはもう」

大仰に目を剥く房五郎だが、彼とてその場にいたわけではないはずだ。富半からの又聞きに決まっている。

「屋敷の井戸は涸れる、用水は涸れる、染松が薪拾いに山に入れば、あれがうろついたあたりの湧き水が涸れる」

「ずっと涸れたままだったのでしょうか」

「数日は戻らなかったそうです。染松を土蔵に押し込めて、けっして水に近寄らないように見張っていても、すぐには戻らなかったということでした」

染松が憑かれてしまったという〈お旱さん〉は土地神だから、生え抜きの土地では力が強い。江戸ではさすがに同じようにはいかないということかと、おちかは考えた。

それにもうひとつ、江戸では他の土地と、水については事情が異なる。

「江戸の井戸は水道でございますから、いかなお旱さんでも、根っから涸らしてしまうのは無理なのかもしれませんね」

そうなのである。江戸は水利の悪い土地柄で、だからこそお上は早くから水道という設備をこしらえた。おちかの暮らすこの神田三島町も、神田上水から引いた水道の水を井戸で受けて使っている。

そんな江戸市中でも、この十年ばかりで掘抜井戸が増えたそうだ。但しずいぶんと深く掘らねばならないし、手間も金もかかる。掘って水が出たはいいが海水混じりで、飲用には適さないということもある。

水道の水で産湯をつかったというのは江戸っ子の自慢話の種だが、一面、それは強がりとや

せ我慢でもある。根っから江戸の者ではないおちかにはそう思える。
房五郎の意固地に歪んだ眉の谷間が、初めて緩みかけた。
――おや、このお嬢さんは存外わかりがいいようだ。
「左様でございます。ですから戸辺様も、染松は江戸へ遣るべしというお沙汰をなさったんでございます」
で、その受け入れ先に金井屋が選ばれたというわけなのである。
「とんだ貧乏くじでございますよ」
房五郎は怒るのをやめてげんなりしている。少し、気の毒な眺めだ。
「最初に話を聞いたときには、私どもも半信半疑でございました。田舎の者は迷信深うございますからな。たまたま何かの拍子に水涸れが続いたのを、一途にこの小僧の仕業だと思い込んでいるだけだろうとも思いましたし」
あにはからんや、金井屋でも立派に水は逃げ出した。
「水瓶や鉄瓶や花活けの水は本当に逃げる――涸れてしまうのでしょうが、水道の水や湧き水は、涸れるというよりは逸れるのではないでしょうか。染どんが近づくと、いっとき、流れが変わってしまうということですね」と、おちかは言った。
山の湧き水だって、涸らしてしまう相手としては、神田上水よりも手強そうだ。
「さあ、理屈はわかりません」
ただの抗弁ではなく、房五郎には本当にそんなことはどうでもよさそうだ。
「とにかく、戸辺様が江戸の水道をご存じだったが厄で、金井屋はあの疫病神めを背負い込んだんでございます」
ぜひとも何とかしていただかないとと、また気張る。
「わたくしどもで何とかできるとは思えませんが、とりあえず、しばらくのあいだ染どんを、この三島屋でお預かりするというのはいかがでしょうか」
おちかの申し出に、房五郎は素直に驚いた顔をした。
「なんと、お嬢さんあんた、進んで疫病神を引き受けようというんですか」
あなたの一存で決めていいことではないだろうと、疑い深そうに言い足した。
「わたくしは主人伊兵衛の名代でございます。わたくしがそうしようと決めたことは、そのまま伊兵衛の意志と思っていただいて結構でございます」
おちかとしても、ふいと思いついたことである。何の見通しがあるわけでもない。ただ、
「三島屋でも水道の井戸から水が逃げるかどうか確かめてみたいものですし」
房五郎の染松に対する態度や、先ほどの激高ぶりから察するに、あの子は金井屋のなかで、手ひどい扱いを受けていると思われる。水に近づかないよう、ひと間に押し込められているぐらいならまだしも、ああして怒鳴られたり叩かれたりすることもしばしばなのではないか。
染松は房五郎の大人げない勘気に思わずふき出してしまうほど根性のある子供なのに、叩かれそうになったときには本気で怖がっていた。あれは、脅されているだけでなく、本当に叩かれたり殴られたりしたことがあるからだろうと、おちかは思う。ならば、話を聞いただけで見捨ててしまっては、こちらの後腹が病もうというものだ。
「そういうことでしたら、金井屋では一向に差し支えございませんが」

なにしろ丁稚としてはまるで役に立たない者だ、という。
「この半月、仕事を教えるも、躾けるもございませんでしたからな。行儀も知りません。山猿のまんまでございますよ」
「それなら、山から郷へ迷い出てきた子猿をいっぴき飼うようなつもりでおりましょう」
にこやかに、おちかはそう言ってみせた。

房五郎を送り出し、おちかが奥へ戻ってみると、勝手口のところに当の染松が座り込んでいた。しゃがんだまま両手でほっぺたを押さえて、いかにも手持ちぶさたの様子である。
「染どん、ちょっとこっちにいらっしゃい」
声をかけると、染松は立ち上がった。傍らに箒(ほうき)とちりとりが立てかけてある。見れば、勝手口の外のあたりはきれいに掃き清めてあった。
「掃除をしてくれたのね。ありがとう」
と、染松のすぐ後ろから、ひょいと新太が顔を覗(のぞ)かせた。
「あら、二人でいたの」
もう仲良しになったのと言いかけるところへ、新太が染松を押しのけるようにしてまっしぐらに飛んできた。土間の上がり口にいるおちかの裾(すそ)に、そのまましがみついてきそうな勢いである。
「おじょ、おじょ、お嬢さん！」
おちかはかがみこんで新太を受け止めてやった。三島屋の丁稚どんは色を失い、目がおろおろと泳いでいる。
「あ、あいつ、とんでもないやつです」
後ろ手に染松に指を突きつけて、
「物干し場の柱にとまった雀(すずめ)を、石をぶっつけて落としちまったんですよ！」
染松はむくれたような顔をして、ぷいと背中を向けた。お勝手の外は裏庭で、物干し場になっており、そこにはよく雀が飛んでくる。おしまとおちかが、菜っ葉の切れっ端などをやるからである。
「雀も石みたいに落っこちて、ぴくぴくいって死んじまいました」
新太は今にも泣き出しそうだ。彼は雀たちが来るのを楽しみにしていて、春になったら雛(ひな)が見られるだろうかと話していたこともある。
「そう、それは可哀相(かわいそう)なことをしたわね。だけど泣かないの。男の子でしょう」
お店の方へ出てお手伝いしてきなさいと、おちかは新太を上がらせた。入れ替わりに履き物をつっかけて、染松へと歩み寄る。が、その前に、くるりと向きを変えて台所の水瓶の蓋(ふた)をとってみた。
この台所には水瓶が三つある。右のひとつが飲用で、真ん中のひとつが煮炊き用、左のひとつが食材などを洗うためのものだ。順繰りに蓋を開けていって、おちかはそのたびにふうと息を吐いた。
三つとも、水がほとんど消えていた。
飲用と煮炊き用の瓶の底には、水の濁りと汚れを取り除くための小砂利(じゃり)が入れてある。朝、

いっぱいに汲んで、昼食のあとにまた汲み足して、使った分を補っておくのがこの家のならいだから、今は八分方以上の水が残っているはずのところだ。

なのに、ふたつの瓶では小砂利が見えている。三つめの瓶では、おちかが袖をまくって手を差し入れると、手首まで濡らさずに、つるりとした底に触れることができた。

おちかが蓋を閉めて振り返ると、染松がこちらを見ていた。そして急いで背を向けた。今度はおちかの目から逃げるような素振りであった。

「お旱さんは、喉が渇いているのかしら」

だからこんなに水を飲んじまうのかしらねと、独り言のように言ってみた。

「井戸の方はどうかしらね。染どん、あたしと一緒に見に行ってちょうだい。井戸がまだ無事なら、二人で水汲みをしましょう」

おちかはすいすいと歩って勝手口の敷居をまたいだ。染松は動かない。

「どうしたの？　手伝って」

「お嬢さん、そんな恰好で水汲みなんかするの」

なるほど、おちかは来客用におめかしをしている。

「着物が濡れたら乾かせばいいでしょう。汚れるわけじゃなし」

袂を帯の端に挟み込みながら、おちかは笑って言い返した。染松は口を尖らせて下を向くと、文句を言う口調で短く尋ねた。

「番頭さんは？」

「金井屋さんならお帰りになりました。あんたは今日から、三島屋の奉公人です」

素直な驚きが、染松の顔に浮かんだ。

「おいらを置いてくれるの？」

「うん」

「どうして？」

おちかは逆に問い返した。「金井屋に帰りたい？」

染松の口がさらに尖った。今度は不平不満のせいではなく、さらに驚いたからのようである。

「何でそんなこと訊くのさ」

「そうねえ、訊いたってしょうがないことだったね。金井屋さんではもうあんたを置けないって言っておられたから」

染松がどんな顔をするだろうと、おちかはちょっと目を凝らした。彼は何度もまばたきをして、口の端をへの字に下げた。

「あのお店にいないと、おいら、富半さんに叱られる」

「勝手なことをするって？」

おちかの問いは、見当外れのものだったらしい。染松は小声でこう続けたのだ。

「けっして村に帰っちゃならねえって言われてきたんだで」

里の話になったからだろう、染松の言葉にお国訛りが出た。

「うちでも、あんたをお里に送り返したりなんかしませんよ。それなら、富半さんの言いつけに背いたことにはなりません。他所のお店に移ったというだけよ」

あんたお掃除が上手ねと、おちかは言った。「丁寧に掃いてあるじゃないの。誰かにやり方

を教わったの？」
姉ちゃんにと、染松は答えた。まだ下を向いたまま、拗ねたように鼻息を荒くしている。
「いいお姉ちゃんね。さあ、まず箒とちりとりを片付けなさい。それと、雀はどこにいるのかしら」
「さっきの新太ってやつがどっかへ持ってった」
お墓を作ってやるっていって。
「雀は米を荒らすんだよ。あいつら目ざといから、一羽が食いもんに有り付くと、すぐ群で寄ってくるんだ。だから、めっけたら落としておかないとまずいんだで」
悪さでしたのではないと、一丁前に抗弁しているのである。
おちかはにっこりしてうなずいた。「あんたのお里ではそうなんだね」
だけど江戸の町では、そこまで雀を目の仇にはしないのだと教えてやった。むしろ愛でたりする。
「だから次からは、雀を見ても落としちゃいけません。それから、今の話をあとで新どんにもしてあげて、ごめんねって言うんですよ」
染松は下を向いたまま黙っていたが、
「こういうことを、郷に入っては郷に従えというんです。わかったね？」
おちかがつと声を厳しくすると、蚊のなくような声ではいと言った。
おちかは水汲み用の手桶を提げ、彼を従えて井戸端へ向かった。井戸は隣の針問屋住吉屋との共同井戸である。

水道の水は、上水から地べたの下の石樋や木樋を通り、枡で枝分かれして竹筒の呼樋から個々の井戸へと振り分けられている。埃除けの屋根を戴いた大きな桶のような井戸のなかを覗き込むとき、おちかは思わず息を止めてしまった。これがすっかり涸れていたら、うちだけでなくお隣にも大迷惑をかけることになる。
幸い、井戸には水が漲っていた。呼樋からもちょろちょろと新しい水が流れ込んでいる。
思わず、安堵の息を吐いた。
「みんな井戸だ、井戸だって言うけど」
染松がまた不満顔をしている。
「こんなの井戸じゃねえ。ただの溜め桶じゃねえだか」
掘抜井戸ばかり見てきたこの子には、確かに江戸の井戸は間尺に合わない代物だろう。
「そうね。でも水の有り難みはどこでも同じなのよ」
水道の仕組みを教えてやりながら、二人で手桶に水を汲む。井戸とお勝手を行ったり来たりして、師走の寒風のなか、三つの水瓶が満ちるころにはおちかの手はかじかんでいた。
染松は、さして寒そうにも見えない。鼻の頭が赤らんでいるだけだ。
――それに、この子は大した力持ちだ。